



ホタルの光に癒されて

2歳半の息子が、手術を終えてストレッチャーに乗せられて戻って来た。頭には医療用の白いターバンがまだ巻かれていた。

小さな体には管が数本着けられている。点滴がポタリポタリと管から体に入っていく。お腹にも、尿が出るほうにも、そして背中にも管があり、その管と管が絡み合って、寝返りをする息子の体に絡みつく。

付き添う私は毎夜、長いすをベッド代わりに24時間息子を見守り続けた。息子は「痛い」とかわがままも言わず、じっと我慢しているように見えた。

手術から3日目のその日、病棟の主任さんが虫籠にたくさんのホタルを入れて持ってきてくださった。

虫好きの息子は、初めてにつこり笑いとともうれしそうに興味深くずっとながめていた。

その夜、消灯になっても部屋は、ホタルの光で十分だった。ホタルの光は寝入った息子を照らし、エールを送ってくれる。ガンバレ、ガンバレ。きつと良くなるからと。ホタルたちは交互に光を発し、青白い息子の顔とそして数本の管を照らす。優しい光の中で息子はスースーと静かな寝息を立て始める。

朝になるとホタルはゆっくりと休み、そしてまた、夜に光を発してくれた。

勤務を終えた後も息子の病状を案じ、山や川に行きホタルを集めてくださった皆さん。ありがとう。

それから息子は2回の手術に耐えた。

そして30余年が過ぎた。人を思いやる気持ちの大切さ、人に対しての優しさは、息子も私も決して忘れない。

息子は今、2児のパパになった。

〈埼玉県〉かとう加藤 なみゑ 66歳

